

第1回／佐倉 一徳さん NHK長野放送局企画総務部副部長 樋口 博さん 長野市産業振興部観光課課長
 第2回／久米 えみさん ながのクラッセ会長 樋口 敦子さん ながのまちづくりカフェメンバー
 第3回／鷺沢 幸一さん アスレながの事務局長 室賀 豊さん 長野市アイスホッケー協会理事
 第4回／清水 隆史さん フォトグラファーほか 常盤 昭二さん CMディレクター
 第5回／虎羽里(トラバリ)ゼーラさん アーユルヴェーダ・健康セラピスト
 第6回／竜野 泰一さん 株式会社エーシーエ設計 取締役副社長〔一級建築士〕
 第7回／木田 勇さん 信濃グランセローズ監督
 第8回／荻原 健司さん 参議院議員・五輪金メダリスト
 第9回／松島 憲一さん 信州大学大学院農学研究科 准教授
 第10回／松岡 保正さん 国立長野工業高等専門学校 環境都市工学科教授
 第11回／浜 このみさん クッキング・コーディネーター
 第12回／角本 浩二さん バランスアドバイザー 長野県健康管理士会会長
 第13回／針谷 友久さん 東京中小企業投資育成株式会社 主任(長野県担当)
 第14回／水野 守也さん 長野市総務部次長 兼庶務課長
 第15回／バドゥ・ビエイラ監督・薩川了洋コーチ・真富信宏キャプテン
 第16回／町田 良夫さん 社団法人長野市農業公社 常務理事
 第17回／中山 修さん 中山法律事務所 弁護士
 第18回／塩澤 研一さん (財)いのちの森文化財団副理事長 株式会社水輪ナチュラルファーム代表取締役
 第19回／小出 陽子さん (同)ふきっ子のお八起 代表 信州おやきブランド化委員会 研究会リーダー
 第20回／宮城 恵美子さん (有)宮城商店専務取締役／木の花屋
 第21回／志村 雅由さん NPO法人 飯綱高原よっこらしょ 代表理事
 第22回／薩川 了洋さん AC長野パルセイロ新監督
 第23回／石沢 一男さん (有)田舎工房 代表取締役
 第24回／新谷 志保美さん バンクーバーオリンピック代表 竹村製作所 勤務
 第25回／越 和宏さん スケルトン競技3大会オリンピック日本代表 システックス所属
 第26回／鈴木 政一さん 長野パルセイロ・アスレチッククラブ強化本部長
 第27回／千村 尚司さん 千村ブレイン代表・ソムリエ
 第28回／川崎 史郎さん フリーライター・市民記者ネット代表
 第29回／安藤 長一さん 篠ノ井消防署署長・緊急消防援助隊長野県隊長(第二次派遣隊)
 第30回／マブソン 青眼さん 俳人・比較文学者
 第31回／井上 裕子さん 信濃毎日新聞社編集局地域活動部長・編集委員
 第32回／田幸 淳男さん 信越放送取締役相談役
 第33回／飯室 織絵さん 観光客向けゲストハウス「1166バックパッカーズ」運営
 第34回／相原 哲さん ながの町神輿連合会武睦会 会頭
 第35回／小林 亨さん 日本オリンピック委員会(JOC)勤務
 第36回／薩川 了洋さん AC長野パルセイロ監督
 第37回／小宮山 義光さん 日本野鳥の会長野支部会員
 第38回／塩澤 研一さん 農業生産法人株式会社水輪ナチュラルファーム代表取締役／(財)いのちの森文化財団 副代表理事
 第39回／俣田 達男さん NTT東日本 長野支店長
 第40回／山田 隆さん しなの鉄道株式会社 専務取締役
 第41回／藤岡 牧夫さん イラストレーター・絵本作家
 第42回／矢澤 秀成さん 園芸研究家/ながの花と緑そして人を育てる学校校長
 第43回／近藤 京子さん カウンセラー/NPO法人「わくわく志事研究所」所長
 第44回／栗田 貞多男さん 写真家
 第45回／鴨志田 明弘さん 野村不動産アーバンネット株式会社 企業不動産部専任部長
 第46回／天野 良彦さん 信州大学工学部物質工学科教授
 第47回／美濃部 直彦さん AC長野パルセイロ監督
 第48回／丸田 勉さん 脚本・演出家 森の家 林りん館館長
 第49回／浅野 邦子さん 株式会社箔一 代表取締役会長
 第50回／平沢 幸子さん 長野朝日放送 アナウンサー



第51回／本田 美登里さん AC長野パルセイロ・レディース監督
 第52回／小田 與之彦さん 株式会社加賀屋 代表取締役社長
 第53回／廣井 紀文さん 株式会社ディーテス 代表取締役社長
 第54回／羽生田 豪太さん 株式会社羽生田鉄工所 代表取締役
 第55回／中島 麻希さん 1級フードアナリスト
 第56回／齋藤 安彦さん 宮司
 第57回／屋敷 陽太郎さん NHKチーフプロデューサー
 第58回／平山 優さん 歴史研究家
 第59回／西村 知子さん 寺町商家運営アドバイザー
 第60回／広瀬 毅さん 株式会社CREEKS 広瀬毅建築設計室代表
 第61回／浅野 哲也さん AC長野パルセイロ監督
 第62回／中島 恵理さん 長野県副知事
 第63回／服部 秀人さん 信州・橋の日推進協議会専務理事/エコファーマー
 第64回／平尾 勇さん 長野県観光機構エグゼクティブ・プロデューサー(前松本市商工観光部長)
 第65回／野池 裕子さん ダイヤモンド・セルフ長野ファースト 代表・講師
 第66回／愛甲 宏明さん 炭平コンピューターシステム株式会社 代表取締役社長
 第67回／坂橋 克明さん フリーバーソナリティー
 第68回／宮下 秀樹さん 株式会社守谷商会 執行役員、国立長野高専客員教授
 第69回／金田一 真澄さん 公立大学法人 長野県立大学 学長
 第70回／笹本 正治さん 長野県立歴史館 館長
 第71回／山本 克也さん 長野市芸術館 総支配人
 第72回／AO VIVO(アォ・ヴィーヴォ):竹内 浩一・中川 雅紀・山極おーじ優子・長谷川 裕晃・中田 寿寛
 第73回／山浦 直人さん 土木・環境しなの技術支援センター理事、長野県立歴史館客員学芸員
 第74回／松本 克幸さん 協栄電気興業株式会社 取締役副会長
 第75回／大室 悦賀さん 長野県立大学グローバルマネジメント学部教授/ノーシャル・イノベーション創出センター長
 第76回／AO VIVO(アォ・ヴィーヴォ):竹内 浩一・中川 雅紀・山極おーじ優子・長谷川 裕晃・中田 寿寛
 第77回／水間 源さん 東御市役所 地域おこし協力隊
 第78回／小澤 吉則さん 一般財団法人 長野経済研究所 理事・調査部長
 第79回／AO VIVO(アォ・ヴィーヴォ):竹内 浩一・中川 雅紀・山極おーじ優子・長谷川 裕晃・中田 寿寛
 第80回／森田 舞さん ゆめサボママ@ながの 共同代表
 第81回／新井 精一さん 千広建設株式会社代表取締役
 第82回／竹内 伊吉さん 大成産業株式会社代表取締役社長
 第83回／AO VIVO(アォ・ヴィーヴォ):竹内 浩一・中川 雅紀・山極おーじ優子・長谷川 裕晃・中田 寿寛
 第84回／シュタルフ 悠紀 リヒャルトさん AC長野パルセイロ監督
 第85回／若林 健太さん 衆議院議員
 第86回／越原 照夫さん 株式会社まちづくり長野 常務取締役
 第87回／FT Naked(エフティー・ネイキッド):林 保之・林 栄一・寺沢 雄一郎・中田 寿寛・長谷川 裕晃
 第88回／荒井 雄彦さん シソーラス株式会社 代表取締役
 第89回／鈴木 隆治さん NUPRI 事務局次長/鈴木土地株式会社 代表取締役社長
 鷺澤 幸一さん NUPRI 副理事長/炭平コーポレーション株式会社 代表取締役社長
 第90回／松坂 彰久さん 善光寺事務局勤務
 第91回／小谷野 俊介さん 株式会社テレビ信州 代表取締役社長
 第92回／FT Naked(エフティー・ネイキッド):林 保之・林 栄一・寺沢 雄一郎・中田 寿寛・長谷川 裕晃
 第93回／栗田 要さん 一般社団法人アプリシエーション 理事長
 第94回／FT Naked(エフティー・ネイキッド):林 保之・林 栄一・寺沢 雄一郎・中田 寿寛・長谷川 裕晃

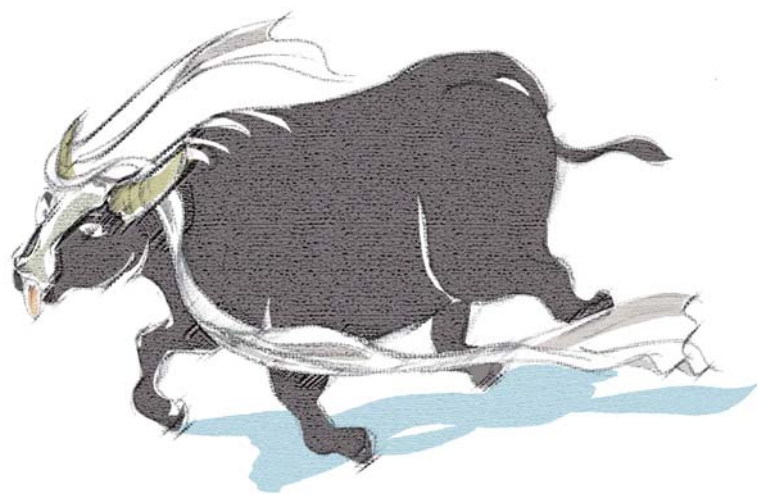
NUPRI Nagano Urban Policy Research Institute NPO法人 長野都市経営研究所

〒380-0834
 長野市大字鶴賀問御所町1289-1丸本ビル2F
 TEL.026-235-7911 FAX.026-235-6166
 www.nupri.or.jp
 e-mail:nupri@nupri.or.jp

わい が や
 サロン

通信

Vol. 95
 2025.3



第95回

出会いの寺 善光寺

講師／堀井 正子さん 近代文学研究家

■座長：岩野 彰／会場：NUPRI事務所 令和7年3月5日(水) 18:00～20:00

寒風雨そぼ降る、春まだ浅き3月初旬の宵——2025年の初回わいがやサロンにお招きしたのはSBCラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」レギュラーなどでもお馴染みの堀井正子さんです。

10年ほど前、『出会いの寺 善光寺』を出しました。それは善光寺が会いたい亡き人に会えるお寺だからお詣りする人がいると耳にし目にしたからでした。今回は拙書の冒頭に登場願った高倉健さんと5代前のおばあさまとの善光寺のお話をさせていただきます。

〇〇に引かれて善光寺

高倉健さんの映画を見始めたのは『幸福の黄色いハンカチ』（監督山田洋次/1977）あたりからです。いちばん印象に残っているのは『八甲田山』（原作新田次郎『八甲田山死の彷徨』/監督森谷司郎/1977）。武田徹さんが好きな任侠モノのころは見に行ってもませんでした。健さんがヤクザ映画から身を引いた理由には映画館での体験があったそうなんです。——観客がワーッとなる。こんな場面で？ 俺はそれでいいのか?と思った。以来、自分がこの脚本ならいいと思う映画にだけ出演し、『あなたへ』（監督降旗康男/東映時代を入れるとコンビ20本目作品/2012）が最後になりました。無口だけど信念があり、思いがにじむ演技が巧かったですよね。

そんな彼が何十年も善光寺の節分会に通い続けていたことは知る人ぞ知る、でした。その経緯、善光寺とのご縁が明らかになったのはエッセイ集『あなたに褒められたくて』（ぐあなた、とは母のこと）を出した1991年。著作によれば、初めて来たのは東映ニューフェイス3年目の昭和34年（1959）。宣伝部から「行ってくれないかな」とお声が掛かり、それも破格のギャラ！ デビューから主演で出演料1本2万円のと、善光寺は5万円+温泉一泊付き。翌年は自分から志願して結婚を控えた江利チエミさんと来ます。

〴〵牛に引かれて善光寺、ならぬ〴〵ギャラに引かれて、始まったご縁でしたが、3年目からは仕事を離れ、一参詣者として行くことにした。超多忙でも善光寺に来るとなぜか「清々しく、すっきりと気持ちがいい」「今年は忙しいからやめてしまおうか、と思うだけですでに気持ちが悪く、どんな無理をしても信濃路を目指し」「気付けば30年続いていた。ここらで区切りを付けて自然体でいく」とエッセイは終わります。

実は初めて節分会に来たのは昭和33年。宿坊・威徳院さん所蔵の写真が何枚もありますから、健さんの勘違いだったのですね。当番だったことから面倒をみられた威徳院の林豪信さんとの出会いを大切に、約束すると相手に迷惑をかけるからと、いつもフラッと「親父さん、いる?」と現れたそうです。

「そうか、そうだったのか！」

ある時、前田淑先生（『近世女人の旅日記集』等を著す）から手紙が届き、5代前のおばあさま小田宅子^{いえこ}のことを知ります。天保のころ、北九州は筑前国から伊勢詣りを果たした後、善光寺詣りした往復800里5カ月の道中を旅日記に残している旨でした。高倉健の本名は小田剛一^{ごうち}、福岡県出身。「祖先の霊とぼくの魂とが呼び合っていたのかもしれない。宅子おばあさんとぼくが、善光寺を通して結ばれていたのだ」。だからこそ、ある時はアフリカ、ある時はアメリカロケ先にあってもトンボ帰りして、過去を



千葉県生まれ。東京、横浜で育ち、東京教育大学文学部卒業後、教職に就く。夫の赴任先に伴って沖縄、中国、長野市にて大学非常勤講師。長野県カルチャーセンター等での講師、新聞コラム連載のかたわら、信越放送ラジオ「武田徹のつれづれ散歩道」レギュラーを30年以上務めている。著書に『近代文学にみる 女と家と絹物語』ほか

振り返るにふさわしい節分の日に善光寺をお詣りしたかったのだ。

小田宅子さんという人／『東路日記』

宅子さんの墓誌の写真がありますのでご覧ください。原文（漢文）を補って説明しますと——婿養子の清七さんと代々続いた両替商をますます富ませた。結婚後に生まれた弟に家業は譲り、夫婦で新たに醤油醸造業を営み繁盛させた（夫婦の肖像画には清七さんが宅子さんを愛しむように描かれています）。また、和歌を能くす。仏教に帰依し善光寺に詣で東路日記を書いた。明治三年、享年八十二。

『あづま路日記 上』『東路日記 下』によれば、誘われて53歳のとき、宅子さんを含めて4人の女友達が供の男3人を連れてお伊勢詣りへ。無事に果たし、筑前に帰ろうか、せっかくだから善光寺へも、となります。裕福だったとは思のですが、約5カ月となれば旅費も半端ない。お金どうしたと思います? 持ち歩いた? [会場：宿代など大きな支払いは書付とか証文を渡した?] 元々両替商でしたから、そうした知恵もありそうです。宅子さんたち一度も追いはぎに遭ってないんです。一度だけ軽井沢・追分で追いかけて必死に逃げたと書かれています。追いついた男が言うには「俺たちは宿屋の客引きだ!」（笑）。天保といえば幕末、それでも日本の治安はよかったってことでしょうね。

善光寺でだけの特別な祈り

墓誌に戻りますが、驚くのは墓誌に九州から遠い善光寺の名が刻まれていること。なぜ? 私が注目したのは、旅日記に記された和歌です。

宅子さんは古典や和歌を習い、5カ月の旅日記を書き上げる力があった方でしたから、道中も事あるごとに歌を詠んでいますが、善光寺での3首は特異！

1首目——善光寺に着くと筑前国と定まっていた坊に泊まり、翌朝本堂へ詣でる。すると、願う人は家のための供養をしてくれるというので小田家の供養を願い出て灯火を捧げた。〈たらちねのために手向くる灯火の うちにも見まく欲しき面影〉

2首目——戒壇巡りの後、一旦宿坊^{こも}に戻り、再び本堂へ。僧の読経に合わせ、お経を唱え続ける〴〵お籠り、が始まる。大勢の人々とともに宅子さんも亡き人の名を呼んでいた。〈＊欄外〉

3首目——お籠りの夜は更けていく。〈亡き^{たま}玉の目にも見ゆらん みな人の御法^{みのり}の声に添へて嘆けば〉

京都にある菩提寺の総本山にも詣で、ひたすら極楽往生を祈りました（善光寺ほかの寺社でも極楽往生を祈りました）が、亡き魂に会いたいという思いが感極まったのは善光寺だけ。祈り、実際、感じとれた! すごい不是吗?

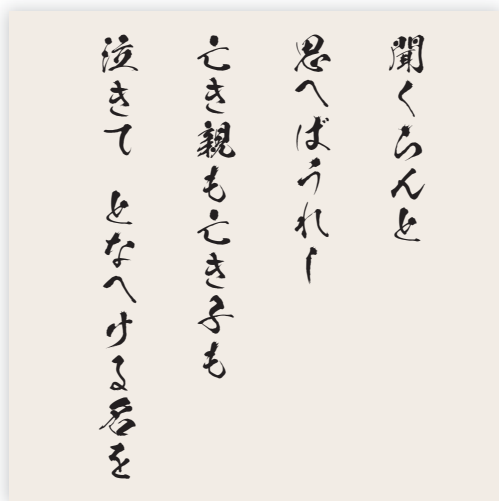
宅子さんが亡き親の姿を求めた場所はほかにもありました。京都三十三間堂は数ある観音像の中に必ず親の顔があるといわれており、探すも、なくて落胆。江戸深川の三十三間堂にも詣で、探すも〈…親には似たる仏になし〉。

それゆえ、宅子さんにとってただ一つお寺を選ぶとしたら、亡き人を身近に感じられた善光寺。だから墓誌にあるのですね。

宅子さんが大切にした親や子という存在、それから百数十年後に高倉健さんが生まれ、おばあさまと同じ善光寺に惹かれ続けたのでした。

〴〵牛に引かれて善光寺、のことわざは、はじめはどういうかたちのご縁でもいい、という意味かもしれません。

地元で暮らしていても知らないこと数多^{あまた}アリ。会員の皆さん、お忙しくとも〴〵わいがやサロン、のドアを開ければ、目からウロコが落ちるお話が聴けることウケアイです。ご参加をお待ちしています。



宅子が善光寺でお籠りしたときの歌。〈聞いているだろうと思うとうれしい、亡き親も亡き子も、私が泣きながら唱える名前を〉



堀井正子 著『出会いの寺 善光寺』信濃毎日新聞社 / 宅子も寄り、改めて親子の縁の深さを感じた西光寺かるかや伝説ほか、高浜虚子、若山牧水等の話が載る

